〔研究論文〕

縄文時代集落考　(Ⅶ)

後　藤　和　民

第二章　縄文集落の捉え方

は　じ　め　に

第一章においては、縄文時代の集落を捉えるための前提となる基礎的な観点について、従来われわれの認識の基盤となってきた関連科学の諸先学の研究成果を、できるだけ客観的に吟味・検討してきた。序論としては、いささか長くなった憾があるものの、長い研究の過程において段階的な発展を示してきた重要な課題が数多く、これまでの把握をもってしても決して十分とはいえない。集落の把握は、もともとその時代の文化全体にかかわる総合的なものである以上、まだなお検討すべき重要な問題が数多く残されている。

しかしそれらの問題については、本論における具体的な課題ごとに、その必要に応じて触れることとし、まずは先を急がねばならない。とくに最近、日本各地において新しい事実が次つぎと発見され、縄文時代に対する認識を根本的に改めるべき必要に迫られている。しかも一部においては、縄文時代にすでに「クニ」が存在していたという推定(註1)さえあらわれ、当時の社会組織や集落に対する概念に混乱を生じつつある。この時にあたって、ことさらに基礎的な観点と集落の概念を明確に規定し、日本考古学界における共通の目的や問題意識をもって、同時代に生きる共同の歴史叙述を行う義務がある。

とくに、考古学が歴史科学であるかぎり、その目的はあくまでも人間集団の文化活動の実態を明らかにし、その変遷の意義を叙述することにある。そして、ある時代の歴史を具体的に叙述するには、当然そこには、「誰が」(主体者)、「いつ」(時間性)、「どこで」(空間性)、「何をしたか」(歴史事実や文化活動)という4つの要素が的確に把握されていることが基本的な前提となる。

ところが考古学においては、いつ、どこで、何をしたかという要素は比較的詳細に把握されても、常に問題となるのはその主体者の解明なのである。たとえば縄文時代における「誰が」は、常に固有名詞をもたない不特定な人間集団、すなわち「名もなき民衆」なのである。しかも、その人間集団が厳然と存在していた以上、その主体者の実体を何らかの形で明確に捉えな

ければならない。それを曖昧なままにしておいては、いかなる歴史叙述も空虚なものとならざるをえないからである。

そこで、この縄文時代の人間集団の実体を考古学的に的確に捉える方法こそ問題となる。かって、「土器型式」なる概念の思弁論的な解釈により、土器型式＝人間集団とするきわめて皮相的な把握がなされた一時期（註2）もあったが、それが理念として成り立っても、それによっては何らの実体も捉えられないことは（註3）、いまさら論ずるまでもないだろう。

むしろわれわれの前には、ある種の人間集団のさまざまな文化活動のなかで、その中心的基盤や本拠地となり、日常の共同生活を営んでいた場所や期間を示し、その結びつきの目的や機能によってそれぞれの性格を異にする人間集団の実在を物語るべき痕跡が厳然と存在している。それらの遺跡の様相や相互の対比によって、その時代の文化の基盤となった人間集団とその本拠を捉えることこそ、歴史叙述においてもっとも必要であり有効な方法である。しかもそれをなしうるのは、集落研究以外にはありえないし、またそれこそ集落研究の最大の任務であるとさえ考えられる。

現在、縄文時代の集落研究は「カオス的状況」にあるという。たとえば、集落を意味する用語一つを取りあげてみても、「ムラ」、「村落」、「村」、「共同体」、「共同組織」、「人間集団」、「居住領域」、「生活領域」、「セツルメント」、「テリトリー」、「本村」、「分村」、「部落」など、枚挙にいとまがない。しかも、それぞれの概念や意味する内容がまちまちである。それらのうち、相互に類種関係にあるものは別にしても、まったく異質なものを指していたり、「似て非なるもの」が混同されていたりする。まさに用語の氾濫が、概念ばかりでなく研究の混乱をも招いているのである。

「ことば」も一つの文化現象であり、その意義・内容も時代とともに変化し、民族によって異なる。また、対象とする時代や研究者の観点や目的意識によってもさまざまに変容するのは当然である。だからといって、現在の日本の考古学界におけるように、多国籍の植民地的な用語の乱用が許されてよいはずがない。いやしくも、日本人同志が自国の縄文時代の集落という共通の対象を、科学的・客観的な考古学的方法によって捉え、それを同じ日本語で叙述しようとするとき、相互の共通概念となるような日本語の用語をもちえないとは、あまりに愚かなことではなかろうか。

第１節　集落の概念

Ⅰ　「集落」の語義

「集落」という文字は、「聚落」の俗字である。戦後、文部省の諮問機関である国語審議会

が選定した当用漢字に、「聚」の字が入らなかったため、その代用として「集」の字が当てられたもので、もともと中国にも日本にも「集落」などという用語はなかった。ここでいう「集落」とは、もちろん「聚落」を指している。

1　中国における「聚落」

「聚落」という用語は、古くから中国の文献に度たび現われることばで、日本の造語ではない。「聚」は、あつまる、あつまり、あつまった人民の物品、むら、村落などを意味し、「落」は、おちる、おちつく、あつまる、さと、むらざとなどの意味に用いる。たとえば、司馬遷の『史記』には、「一年而所居為聚落、二年成邑、三年成都」とある。また趙師淵が編んだ『通鑑綱目集覧』の中には、「人所聚居故謂之村落・聚落・屯落」とか、「聚為人所聚居、落居訓人所聚居」とある。

これらの古文献やその解説書によっても明らかなように、中国における「聚落」の語義は、人類の初源的な集団の形態や集団居住の状態を示し、同時にその集団が占居し、その生活を営む場所（立地）をも含めた概念であったことがわかる。

2　日本における「むら」

わが国において、古来より「聚落」を意味することばとしては「むら」がある。この「むら」は、「群がる」からきており、「むら」は「むらい」（群居）を意味していた。たとえば、『倭名類聚抄』によると、「村、無良野外聚居也」とある。また『古事記』に、「埴生坂に、吾が立ち見ればかぎろひの、もゆる家牟良、妻が家のあたり」という歌が載っている。これは、「むらがること」（むれ）が転じて「むら」となったように、「群れ」を意味するときにも、「むら」といい、村という字を当てている。稲の束を積み上げた山を「稲むら」と呼ぶのも、そのたぐいである。

したがって、日本においても人間集団の初源的な形態が「むら」であり、その人間集団が居住する場所を含めて「むら」と呼んでいたことがわかる。すなわち、中国における聚落と日本における「むら」とは、ほぼ同意語なのである。ただ日本の「むら」の概念は、時代が進むにつれて、行政区画としての「村」となり、町（都会）に対する邑（田舎）となり、その意味や対象がさまざまに変化してゆくので、聚落ほど安定した概念としては捉え難いのである。

日本で「聚落」ということばが用いられるようになったのは、おもに明治になってからである。1879年のモースの『大森介墟古物篇』では、villageを「山村」と訳したり、dwellingsを「部落」と訳しているが、1887年の上田英吉による「下総国千葉郡介墟記」では、すでに貝塚は原人が「聚居部落ヲ為シ」ていた跡であり、それらが点在して「恰モ一脈ノ聚落ヲナシシガゴトシ」といっている。

しかし、学術用語としてはじめて「聚落」という用語を用いたのは、おそらく1898年における新渡戸稲造の『農業本論』であろう。まだここでは、「人家の聚落」とか「一団して聚落

せしか」、または「当初人家の聚落せし理由」などと、名詞・動詞・形容動詞として流動的に用いているが、それが「むら」を意味していることは明らかである。以来「聚落」ということばは、人文地理学、社会学、経済学、考古学など人文科学における学術用語として、各分野で広く伝統的に用いられてきたのである。

3　ヨーロッパにおける集落の用語

ドイツでは「聚落」を意味することばとして、Siedelung またはSiedlung がある。これは、ギリシア語のsitze（すわる、居住する）や、setzemich（すわる）などの語原からきており、動詞のsiedelu（定住する、移住する、植民する）が名詞化したものである。

イギリスでは、聚落のことをsettlementというが、この語原はラテン語のsedeo, sedere, sedi, sitzen（すわる、居住する）などからきている。動詞のsettle は、「落着かせる、安定させる、定住する」の意味で、もともとは「新たな土地を開拓して移り住む」という意味をもっていた。これが名詞化したものである。

フランスで聚落に当たることばは、etablissemen humaisで、語原はラテン語のstabilire（安定させる、定着させる、建設する）からきている。動詞のetablirは、「しっかりと据える、建設する、住居を決める、身を固めさせる」などの意味で用いられる。

これは、ドイツのsiedelung やイギリスのsettlement が、自然発生的で土着的な定住を意味しているのに対して、かなり人為的・作意的・計画的・制度的な意味が加味されているといわれている。たとえば、歴史地理学の父といわれるP. V. ブラーシュは、その名著『人文地理学』の中でこの用語を用いているが、これを翻訳したアメリカのビンガム夫人は、次のように嘆いたという。

「この言葉にしっくり合うような言葉は英語にはない。この言葉は、人間が自分自身やその所有物を入れるために、一時的または永久的に役立つように建てたあらゆる築造物――それが離れた一軒家でも、また多く集っているものでも――を意味する」。

以上のように、「集落」ということば一つにしても、それぞれの国や民族の文化的遺産であり、その歴史的背景や生活体験、民族性や地域性などによって、その意味はかなり違ってくる。しかも集落の概念そのものが、それを対象とするそれぞれの科学の目的や観点によっても多少づつ異なり、また時代の進展に伴って、その包摂する範囲や対象の捉え方がいくらかづつ変ってきている。といって、その対象である集落そのものの実体や本質的な意義がその都度変ってしまうわけではない。ただそれは、実体を捉えようとするスポットの当て方によって、表出される映像が変化するにすぎない。だからこそ、集落は集落のままに、考古学においては考古学独自の観点によって、自主的な概念を確立しなければならないのである。

Ⅱ　人文地理学における集落の概念

「人文地理学」といっても、F. ブラーシュ（1800～1900）以来今日に至るまでめざましい発展をとげているので、集落の捉え方についても一概には規定できない。しかし今日、日本の学界において一般的に認識されている概念について検討してみたい。そこで、日本の人文地理学における代表的な名著とされている矢嶋仁吉の『集落地理学』(註4) によると、およそ次のように規定されている。

まず集落とは、単なる建造物としての家屋の集合体を指すのではない。それに付随する土地、道路、水路、空地など、「日常生活の舞台」をも含めた総称であって、「一定地域における居住形態を一括した意味」にとるべきであるといっている。

「集落」の語義は、英語のsettlement，ドイツ語のSiedlung，フランス語のetablissement humain など、そのいずれにしても、「土地への定着を意味する言葉で、人類の共同生活の単位をなす家の集まりを総称したものである」。そして、「もともと人々が群集したり散在したりして生活する姿を指したもので、人類の社会生活の本拠であることを意味している」という。

そして「集落地理学」の役割は、「人類の居住地域が如何にして成立し、発展したか、集落は如何なる形態をしているか、集落は如何なる土地に分布しているか、集落は如何なる機能を有しているかというような問題を、地理的環境に関係づけて研究する」ことにあるという。すなわち、「集落の発達と土地との関連の考察を以て、その中心課題」とし、「あくまでも居住地域の地域性の把握を主眼とするものである」（傍点筆者）という。

ここに、集落の地域性にスポットを当て、その地域性の特色や意義を解明するために、集落を手段化し、一つの景観として捉えようとする人文地理学独自の目的と観点が明確に表明されているのである。

Ⅲ　社会学における集落の概念

社会学において、もっとも基礎となるのは社会集団の概念であり、集落はその社会集団の一つとして捉えられている。まず、F.テンニースの概念規定 (註5) によると、「社会集団」というのは、「それを構成する人々の間に、何らかの程度において、おたがいの生活や仕事をともにしていこうとする結合の関係がたもたれており、またそのことによって人々の行動なり意識なりが、何ほどかある一定の方向に組織されているところに、その特徴がある」という。

この社会集団については、従来さまざまな観点によって、いろいろな分類が試みられているが、その基礎となったもっとも代表的な研究としては、次のようなものがある。

1　マッキーヴァーの社会集団

R. M.マッキーヴァーの『社会学入門』(註6) によると、社会集団は次のように分類されている。

A　Comunity（共同体）……村・町・地方・クニなど、無意識的な共同生活の一定領域を意味しており、そのなかで人々が種々さまざまな生活様式をもって互いに接触・交渉し合う結果、おのずからそこに共通の慣習や伝統や社会観念が成り立ち、それによって他の社会から区別される独自の特徴をもつもの。

B　Association（派生社会）……Comunityの内部に存在し、その生活を基盤とする一つの組織や機関で、ある特定の限られた目的や利害を、ある特定の計画的・組織的な方法をもって追求するもの。

2　テンニースの社会集団

F.テンニースは、その代表的な名著である『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』(註5) において、おもに人間の本質的・選択的意志や結合紐帯のあり方により、次のように分類している。

A　Gemeinschaft（共同社会）……お互いの愛情や理解や同情にもとづき、相手の人そのものに結びついた暖かい人格的・有機的な結合を意味し、住居、土地、仕事などの共同を基盤として、相互に熟知し了解し愛着をもつ生命の発展過程を、植物的（有機的）・動物的・人間的という３つの段階に対応させると、家族（血縁社会）、村落（地縁社会）、都市（友情社会）がその典型となる。

B　Gesellschaft（利益社会）……ある特定の目的を達成するための便宜的な手段として、かりに相手方を選んで協同しようとする比較的冷めたい非人格的・機械的な結合を意味する。思惟による人為的な構成で、限定された共通の目標が先にあり、その目標への到達に関してのみ協働する。その活動範囲や勢力圏は互いに厳格に区切られ排他的である。その典型として、大都市、国民、世界の３つを挙げている。

3　日本社会学会の社会集団

以上のような観点を基礎とし、その後の研究成果により、日本の社会学の学界における一般的認識として、日本社会学会は『社会学』(註7) において、「主として集団の成立過程」を基準とした次のような分類を提示している。

A　基礎的（自然的）集団……家族・氏族・部族・民族、もしくは村落・都市その他の地域集団などのように、血縁や血縁の共同を結合の紐帯として自然的・自生的に成り立ち、しかも他の集団に対しては発生的に基礎的な意義をもっているもの。

B　機能的（人為的）集団……国家・政党・会社・組合・学校・宗派・クラブなどのように、人々のもつ目的や意志や利害の共通を結合の紐帯として、特定の機能を果すために人為的・

計画的につくられ、基礎的集団の生活を基盤としてそれから派生するところに特質がある。

以上のように、集落は社会集団の中でも、血縁や地縁を結合の紐帯として自然に自生的に構成された、もっとも基礎的な人間集団として捉えられている。したがって集落は、コミュニティ（共同体）の一種であり、ゲマインシャフト（共同社会）の一つでもある。いずれにしても、社会学においては、集落という共同生活を営む一定の領域における人間集団の在り方にスポットが当てられ、その地域性を主とする人文地理学と対照をなしている。

Ⅳ　考古学における集落の概念

日本の考古学において、考古学独自の観点から「集落」の概念を明確に規定したものが、はたしてどれだけあったろうか。その多くのものが、人文地理学や社会学における集落の概念や「社会集団」の概念をそのまま借用してきたにすぎない。それらを整理するために、まず集落の概念が明示されている代表的な論考だけを、ここに挙げておきたい。

1　上田英吉の「下総国千葉郡介墟記」(註8)

東京湾沿岸の千葉市を中心とする地域における加曽利貝塚や犢橋貝塚などの主要な貝塚を、いち早く学界に紹介した報文である。このなかで、上田はすでに次のように「聚落」の概念を用いている。すなわち、それらの多数の貝塚のあり方は、「東ハ小金沢ヨリ西ハ犢橋ニ至ル凡四五里ノ間、内海ニ枕セル丘上又ハ丘腹ニ点在シテ、恰モ一脈ノ聚落ヲナシシガゴトシ」という。ところが、別の個所ではこう述べているのである。

> 邃古千葉郡内ニ住居シテ介墟ヲ聚積シタリシ原人ハ、其地海陸両産ニ穣カニシテ生計ニ便ナリケレバ、酷シキ饑餓ニ陥ル丁少ナク、随テ人々相食ムノ陋風ヲ脱シ、類属相親ミ聚居部落ヲ為シ、内ハ以テ衣食繋命ノ諸業ヲ扶ケ、外ハ以テ寇敵猛獣ノ襲来ヲ済フ、故ニ混沌無智ト雖ドモ親愛ノ情転々切ナリシヤ必セリ。

すなわち、各貝塚はそれぞれゲマインシャフト的な共同生活を営む「部落」を構成し、それらが一定領域を占有して、一つの「聚落」をなしていたというのである。別段、それほど用語の厳密な使い分けは意識されていなかったかも知れない。しかし集落というものが、そのような自然的・自生的な結合紐帯によって、共同生活や共同生産を行う社会集団として捉えられ、その基礎的な領域として認識されていた可能性がある。だが残念ながら、その後の発展的な研究の成果はみられなかった。

2　柴田常恵の「石器時代住居阯概説」(註9)

1923年、富山県朝日貝塚において、わが国ではじめて縄文時代の竪穴住居阯を発見し、それを完掘した柴田常恵は、住居阯研究の意義について、次のように述べている。

「住居は衣食と相並んで称せられるが如く、人類の生活上、欠くべからざる必要なものであ

る」。したがって「住居阯の調査は、それ自身としても価値がある」が、「また一面に於ては、住居阯の研究は当時の生活の状態や社会組織などを知るにも大切なものである」。すなわち、「屋内に於ける住居が起臥の状態」や「其日常生活の一班」ばかりでなく、「住居阯の聚落的関係にして知れるならば、彼等相互の間に存する社会組織を知る便もあって、文化状態を推察するに足るものがある」。

すなわち、集落は単なる住居址の集合ではなく、人間集団の日常生活の場であり、その社会組織や文化の基盤であることが、すでに十分認識されていたことがわかるのである。

3　和島誠一の「集落址」(註10)

さきに触れたように、和島は「原始聚落の構成」(註11) のなかで、縄文時代の集落は、「強固な統一体として機能せざるを得ない」から、それぞれの成員は、「生産の面では、聚落全体の組織的な動きに強く規制される一部分として、初めて意味を持つ」ものであったとしている。そして、実際の考古学的成果にもとづき、縄文時代から弥生時代に及ぶ集落構造の変化の実相を具体的に提示した。これは別段、集落や共同体そのものの概念を定義したものではないが、その具体的なイメージのなかで、集落に対する観点や捉え方が示され、当時の学界に大きな衝撃を与えた。しかし、その集落の概念がより明確に示されているのは、むしろこの『日本考古学講座』における一文であろう。

すなわち、まず「集落は人類が社会生活を行ってきた場」であり、その「社会生活の本拠である」という。その集落は、「ある時代の社会の一つの単位として、その生活内容」を集約しており、しかも「それら一切の生活内容のあり方を規定する社会関係を最も直接に示すもの」であると捉えている。

いうまでもなく、これは社会学的な観点にもとづき、集落を社会生活の基盤とし、特定な結合紐帯(社会関係)によって構成された人間集団の一単位、すなわち共同体として捉えている。したがって、集落の地域性よりもむしろ、その構成主体である社会組織に重点を置いている点に注目すべきであろう。

4　麻生　優の「住居と集落」(註12)

さきに、1956年の「縄文時代後期の集落」(註13) において、「集落とは住居群および住居址群と本質的に結合している生活舞台全般をさす概念である」と規定し、具体的に「馬蹄形貝塚」における「馬蹄形集落」の共同体規制について論じている。しかし集落の概念規定としては、むしろこの『日本の考古学』における一文の方がやや明確であり、重要な問題を含んでいる。

すなわち麻生は、ここで再び先の概念規定を繰り返した上で、「したがって、住居と集落との関係を追求することは、家族と社会との関係を追求することになる」という。そして、「つまり"ヒト"を中心とする家族関係と社会との関係は、いきおい生活文化全般との相関関

係をかんがえなければならなくなるであろう」といっている。

この「生活文化全般との相関関係」こそ、実は集落の本質的な問題であるが、ここではその具体的な内容についてはほとんど触れていない。しかしこの集落の捉え方は、先の論文における「集落研究は、共同体研究のうちの基礎的な操作として重要な意義を担うものである」とする社会学的観点からは、歴史学として一歩前進していることだけは確かである。

5　後藤和民の「原始集落研究の方法論序説」(註14)

ところで、麻生優のいう「生活舞台全般」という把握は、中谷治宇二郎のいう「生活地点一般」としての遺跡の概念(註15)と合致してしまう恐れがある。まず集落は、そのような一般的な遺跡とは断じて「混同すべからざる絶対的優位性」をもつものとして捉えるべきである。なぜならば、「生活地点」や「生活舞台」という場合、それは住居であり、狩猟・漁撈の場であり、埋葬や祭祀の場所であり、あるいは交易の市場や露営地や交通路でさえありうる。それらは、たしかに人間集団の文化活動の痕跡として、いずれも重要な「生活舞台」である。しかし、「集落とは、なによりも第一に、人間集団の生活の基盤であり、社会生活の本拠地である。狩猟、露営、埋葬、祭祀、交易など、人間集団のあらゆる文化活動の求心的原点である」。すなわち、「集落は他の遺跡の中心的存在であると同時に、あらゆる遺跡の基盤(ベース)となるべき性質のもの」だからである。

したがって集落は、「ある人間の単位集団が、ある特定な場所(土地)を占居し、それを本拠として、ある期間定着しながら共同生活を営むことを必要条件とする」。しかも「そこには、何らかの共通の目的や結合紐帯を有し」、「その人間集団あるいは共同生活自体を存続せしめるべき、何らかの社会規制がなければならない」。すなわち、人間集団の存在を前提として集落を規定すると、次のようになる。

集落とは、ある結合紐帯によって集合した人間の単位集団が、一定の土地に一定の期間にわたって定住し、一定の社会規制のもとに共同生活を営む、その本拠地である。

この概念規定は、従来の定義に比べて決して新しいものでも完全なものでもないが、実はその前提条件となる、「あらゆる文化活動の求心的原点」として他の遺跡と峻別するところに、重要な意図があった。なぜならば、縄文時代の文化や歴史を叙述するとき、その主体者の実体を何によって捉えるべきかが問題である。しかもその「いつの、どこの、誰が」を具体的に示しうる考古学的表象によってこそ、それを定着する必要がある。そのためには、さまざまな形で表現されたいろいろな人間集団のあらゆる文化活動の痕跡(遺跡)のなかで、その文化活動の主体者となったもっとも基礎的な社会集団の実体を止めている痕跡を抽出しなければならない。そのような文化の基盤となった人間集団の実在の跡をこそ、集落として捉えようとするからである。

6　堀越正行の「縄文時代の集落と共同組織」(註16)

まず「集落とは、人間の行動が集約されている経済・社会・精神生活の場所、すなわち人間集団の日常生活の場である」という。そして、集落の成立条件として、「そこには、居住・調理の場が、その最低の条件として存在している。一般に居住は彼らの定着の意志を具体化した徴標であることから、住居のない集落はありえない。同時に食料を熱処理した炉のない集落もありえない」という。

なお集落の範囲については、「集落が生活拠点であり、行動の帰結点であるという認識に基づけば、集落の範囲は日常的な集落生活に要した範囲ということになり、これを居住領域と換言するならば、資源としての動・植物質食料や原材料の獲得領域は、生活領域ということになる」という。

また「共同組織」については、縄文時代を「採集経済時代」であると同時に「交換経済時代」として捉え、従来考えられていたような「自給自足の閉鎖性」ではなく、「隣接諸集団間の密接な接触を維持していた」とし、「そこにはじめて、一定程度の社会的規模の共同組織が存在しうる」といっている。そして、「その共同組織は、何よりもまず生活の共同組織であらねばならない」とし、地域集団の例として千葉県千葉市域を取り上げ、「海浜の利用を人間行動として反映し、集落を長期に営んだ定住生活の反映と考えられる」大型貝塚と海との関係を時間的に分析した。

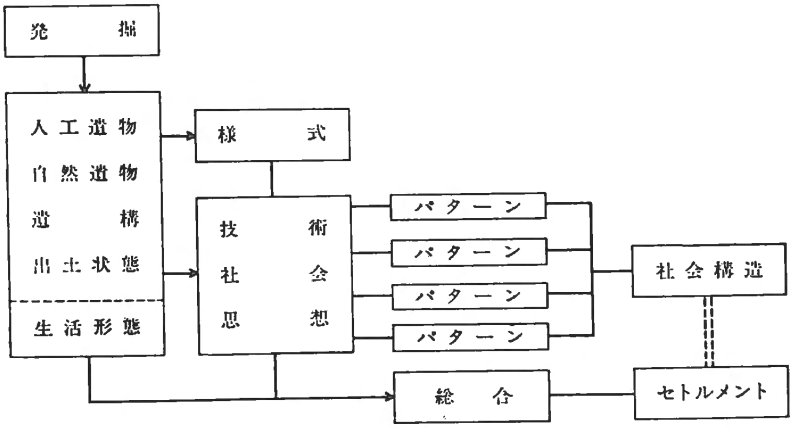
その結果、「本例は、縄文時代にあってもっとも地域社会が共同組織化した例の一つであろう」としながら、「しかしまだ採集経済であるが故に、村落は存在しえないし共同体は形成しえないのであり、単位集団（＝共同態・ゲマインシャフト）が営む集落と原始共同体という社会関係があるにすぎない」と結んでいる。しかしここでは、「村落」・「共同体」・「共同態」・「原始共同体」などの用語を使い分けていながら、その概念規定が不明瞭なため、このままでは何のことやら一般には一向に理解できないであろう。

V　文化人類学における集落の捉え方

ここでは、文化人類学そのものの本来的な目的や方法については詳しく触れる余裕がないので、考古学研究に関連する範囲の問題として取り上げておきたい。とくにアメリカにおける考古学は、本来は自然史の分野に属しているが、そのうちの人文科学に関する内容については文化人類学の分野に含まれている。その文化人類学的考古学の最近の動向として、Settlment Archaeology という新しい研究分野が抬頭しているので、ここでは、それについて簡単な吟味を試みるに止めたい。

1　C.T.キーリーの「セトルメント・アーケオロジー」(註17)

まずキーリーは、「アメリカにおける最近の考古学研究の一趨勢」として抬頭してきた



第1図　セトルメントの概念図（C.T.キーリー　1971，による）

Settlment Archaeologyという新しい考古学の方法論は、「<セトルメント Settlment>を基本的単位として、過去の社会文化の体系を復元・解明することを目的としている」という。そして、その<セトルメント>の定義として、キーリー自身は次のように述べている。

<セトルメント>とは、一つの場所において特定の集団が一定の時間的・空間的限定の下で占居した証拠の認められる単位のことである。そしてその特性は、①人間が占居していたという証拠としての人工遺物、②<セトルメント>の位置している環境の2つによって具体的に示され、抽象的には①遺構および遺物のあり方と、②それによって示される行動形態によって示される。

しかも、「このようにして<セトルメント>の各々の特性および様相は、各々のあり方から抽象されるパターンで区別され、そのパターンは更に統合され、社会形態・組織にまで認識を深めることができるのである。そして、この<セトルメント>を考える場合、つねに時間的限定性および自然環境（自然遺物など）に対する顧慮が払われねばならない」というのである（第1図）。

これをみても明らかなように、キーリーのいう<セトルメント>とは、これまで取り上げてきたわれわれの「集落」の概念とはほど遠いものであり、むしろこれは、日本の考古学において一般的に用いている「遺跡」の概念に相当している。逆に、一般的・総括的な概念である「遺跡」のなかから、それらの拠点や中核となるべき「集落」の概念を抽出して規定しなければならないはずである。なのに、人間集団の多種多様な文化活動や行動の痕跡を無差別に一括し、それをいかなるパターンに分析してみても、そこには何らの具体的な文化様相も把握できない。しかも、それらの抽象的なパターンを総合してみても、それはさらに抽象的な「遺跡」の概念に還元されるだけである。すなわち、これは観念のなかだけで空転する循環論で、具体的な人間の歴史を叙述したり、文化様相の歴史的意義を究明するものとは到底なりえない。

2　K.O.チャンの「セトルメント」と「共同体」の概念(註18)

ところで、キーリーが紹介している現在アメリカにおけるSettlement Archcaologyの代表的な研究成果として、チャンの業績について触れておかねばならない。まずチャンは、彼が発掘調査したＦＴＰ遺跡における分析によって、次のような「２つの相関的なパターンがあることがわかった」という(註19)。

① ＜セトルメント＞の広がりと自然環境への適応形態としての＜セトルメント・パターン＞、

② ＜セトルメント＞の社会的な反映としての＜コミュニティ・パターン＞……とくに社会学的概念と関係がある。

ところが、「しかし＜セトルメント＞と＜共同体comunity＞の間が例外なく密接な相互関係にあると考える必要はない」という。そしてチャンによると、共同体とは「一定の個人的な行動ならびに社会的行動によって特徴づけられる特定の人間集団である」(註20)というのである。

そこでチャンは、＜セトルメント・パターン＞と＜共同体パターン＞を解明する方法として、「社会形態に関する二つの注目すべき研究を行っている」という。その第一の研究は、53カ所の新石器時代の社会に関するもので、彼は「集団」を３つの段階に分類している。これと同じような分類を行っているのがB.G.トリッガーなので、両者を対応させながらまとめてみると、およそ次のようになるという。

① ＜家族household＞――（集団habitation）……一つの＜セトルメント＞の特性を反映する最小の単位と考えられる。

② ＜共同体comunity＞――（共同体comunity）……「日常生活を共にする関係」という観点からみると、「一軒の家」または「村」のいずれかで、「村」はさらに地理的構成と血縁関係において、一系、多系、または非血縁系などにより各々細分化することができる。

③ ＜共同体群comunity group＞――（社会society）……＜共同体＞が集合あるいは組織化されたもの。これは＜セトルメント＞とは直接には対応せず、より次元の高い、いわば抽象的な概念で、現在この段階の解明がもっとも遅れているという。

K.O.チャンの第二の研究は、極地民（エスキモー）の社会分析で、ここではまず、①＜共同体＞の場、②キャンプサイト、③市場という３つの＜セトルメント＞に分類できるとし、さらに、それらに対応して次のように分類されるという。

① 年間を通じてほとんど永続的に利用されるもの（たとえば灌漑農業地など）。

② 半永続的に利用されるもの（焼畑農業地など）。

③ ある決まった季節に、一時的または毎年、基地を伴って季節的に利用される前進基地、（同一かまたは移動的基地から一定の地域を周期的に利用する場合）。

④ 一度かぎり使用するもの。

これによって、さらに明らかになったように、＜セトルメント＞＝集落と解釈したのでは、

混乱をきたすべき特殊な概念で、たとえば同じSettlementという用語を用いるイギリス人でさえ、恐らくこの概念は理解できないであろう。結局この<セトルメント>とは、きわめて単純な「占居形態」や「人間存在の痕跡」を包括した概念で、われわれの「遺跡」の概念に類するものにすぎない。だから<セトルメント・アーケオロジー>とは、所詮、遺物学に対する「遺跡考古学」や「遺跡学」を意味するものにすぎないのである。

Ⅵ　「集落」の定義

まず筆者は、これまでにも再三強調してきたとおり、考古学とは歴史科学の一分野であり、環境・遺跡・遺構・遺物などの資料や情報を駆使して、各時代の具体的な歴史を着実に叙述してゆく科学であると考えている。そこで、集落を捉えるため、考古学の対象とする史料の概念のなかの集落の位置づけから再確認しておく必要がある。

1　考古学の対象

(1)　遺物（ remains ）

人間集団が、生産や生活、埋葬や祭祀、交易や戦闘などのあらゆる文化活動において、道具や器具として用いたもので、それによって人間集団の存在やその活動の具体的内容を究明しうる資料。たとえば、石器・土器・装身具・農工具・祭器・武器など、必要な記録を終えた後に、その出土地点から移動しても価値を失わないものをいう。

(2)　遺構（ facilities and compositions ）

A　施設（ facilities ）……ある目的のために、人間集団が作意的に大地に構築・施工したもので、文化活動のための諸施設として機能するもの。たとえば、陥穽、炉穴、住居址、貯蔵穴、埋葬土壙、古墳、城郭遺構、各種建築物……など。

B　構成物（ compositions ）……遺物の出土状態や埋没状態、遺物と遺物の共伴関係など、人間集団の活動内容や意義を実証・推理するための観念的な構成物をいう。たとえば、層序、石器群のユニット、文化層、生活面、貝層断面、貝塚、土器塚……など。

これらは大地に結びつき、その環境や遺跡全体のなかの位置などによって、その機能や意義をもつから、現地から切り離して移動すると、本来の意義が半減してしまうものである。

(3)　遺跡（sites）

日常生活をはじめ、各種の生産活動や信仰・経済・政治・軍事に至るまで、人間集団のあらゆる文化活動が行われた場所（大地の広がり）をいう。当然、遺物や遺構の所在地もこのなかに含まれるが、その分布範囲だけが遺跡の範囲を限定するものではない。たとえば、露営地、集落、共同祭祀場、古墳（群）、狩猟地、馬牧、城・砦・館址、政庁跡、廃寺址など。それらは、その場所や環境が選ばれたことに重要な意義があるので、その場所からは移動できず、また移動できたとしても、その意義を失ってしまうものである。

(4) 環境（circumstances）

ここでいう環境とは、各遺跡の存立基盤となっている大地の広がりや、その立地・地形、湧水や水系、植生や動物相などの自然条件や生活条件を指し、本来遺跡の概念のなかに含まれるべきである。一部の旧弊な考古学者のなかに、遺物や遺構の分布範囲のみをもって遺跡の範囲とする者もあるので、ここでことさら別個に取り上げて強調しておくのである。

たとえば、遺跡が立地する台地の周辺にある支谷などは、その台地を特徴づける相対的な地形である。もともと谷なくして台地はなく、台地なくして谷はない。その支谷は、当時の生活用水の供給源や水利であり、当時の植生や気候などの環境を復元するためには不可欠な花粉や炭化物の宝庫で、明らかに遺跡の範囲に入るのである。

2 遺跡の分類

人間集団のあらゆる文化活動が行われた場所を「遺跡」と総称するならば、遺跡はその文化活動の内容によって、いくつかに類別できるはずである。それは、考古学研究の進展により、文化活動の内容が明らかになるにつれて、より細分化されていく傾向にある。日本考古学において、現段階で推定しうる縄文遺跡は、少くとも次の9種に分類できるであろう。

a 露営地（キャンプサイト）……人間集団自体の移動や、狩猟・漁撈活動などにおける臨時的な居留地やキャンプ場など。洞窟、岩陰、炉穴、焚火址……など。

b 一般集落……定着的な日常生活の場で、一般に短期間に継続して存続する傾向があり、おもに日常生活用具、生産用具、住居址、貯蔵穴を伴い、特殊遺物や特殊遺構に乏しい。

c 特殊集落……比較的長期間にわたっているが、断続的に回帰する傾向があり、共同生産、共同交易、共同祭祀などの場として、一般集落の中心に位置し、大型貝塚、工房址、埋葬、貯蔵穴、祭祀遺構をはじめ、土偶・石棒・装身具・特殊土器などの特殊遺物が集中している。

d 工房址……一般集落や特殊集落以外の場所で、もっぱら土器や石器などの道具を製作したり、その原料である粘土や石材を採取した痕跡。

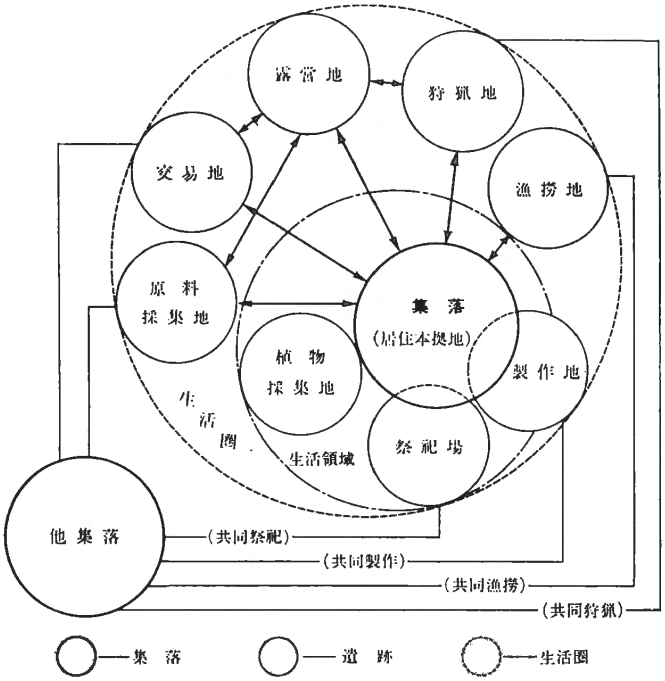
e 生産址……植物採集・狩猟・漁撈の場、貝のむき身や干貝加工、製塩址など、もっぱら生産活動が行われた場所。

f 交易場……各地の資源や余剰生産物などを持ち寄って、相互に物々交換を行った原始的な市場が所在した場所。特殊集落内にあった形跡もあるが、将来別に発見される可能性がある。

g 祭祀場……集落とは別の場所で、もっぱら共同埋葬や共同祭祀が行われた場所。ストーンサークル、配石遺構群など。周辺の調査により、将来特殊集落に含まれる可能性もある。

h 交通路……集落と集落を結ぶ交通路、生産地と集落を結ぶ運搬路、物々交換のための交易経路など、将来の研究によって究明されるべき重要な遺跡である。

i その他の遺跡……以上のほか、火災、地震、洪水、事故、闘争など、不慮の災害や臨時的、偶発的な行動に伴う痕跡。



第2図　集落と遺跡の概念図（後藤和民作図）

3　遺跡のなかの集落の位置

従来にも、いろいろな形で遺跡が分類されてきたが、それらはただ分類するだけに止まり、各遺跡相互の有機的関連性について的確な把握がなされたことはほとんどない。むしろ、折角分類した遺跡を同列・同格に取扱っているところに問題がある。先に挙げたC.T.キーリーや小林達雄の「セトルメント・パターン」などは、その典型的な例であろう。

ところが、これらの遺跡のうち一般集落と特殊集落とは、その他の遺跡と決して混同してはならない実質的な相違がある。なぜならば、人間集団のあらゆる文化活動は、この集落から出発して集落に帰着する。その行動の原因と結果は、常に集落内の人間集団そのものにあるからで、したがって、あらゆる文化活動の痕跡すなわち遺跡は、この集落との関連によってこそ、はじめて意味をもつからである。

すなわち集落とは、あらゆる文化活動が集約された求心的原点であり、文化創造の基盤である。この集落においてこそ、文化は創造され育成され伝承されてゆく。まさに集落こそは、その他の遺跡の根源的な基盤（ベース）である。ここに、他の遺跡とは決して混同してはならない絶対的な優位性がある。これはすでに、筆者が再三にわたって強調してきたところであるが、まだ一部に理解できない向きがある。しかし、この基本的な認識なくして集落を論じてみても、あまり意味をなさないことを、やがて自覚せざるをえないであろう（第2図）。

4　「集落」の定義

以上の観点に基づいて、ここに改めて「集落」を定義すると、次のようになるであろう。

集落とは、ある結合紐帯によって集合した人間の単位集団が、一定の土地に一定の期間にわたって定住し、一定の社会規制のもとに共同生活を営むその本拠地であり、その単位集団が行うあらゆる文化活動の原因と結果が集約された求心的原点である。

したがって集落には、当然その文化活動の主人公である人間の単位集団を中心に、その自然条件や生活条件などの環境も含められる。しかも、他の遺跡の分布やその有機的関連によって、当時の文化全体を把握する基盤として、他の遺跡とは混同すべからざる絶対的な優位性をもっている。このような歴史の主体となる人間集団の存在性をもって「集落」という。

（千葉市教育委員会・文化課）

〔脚　註〕

1　小林達雄；「越後新潟火炎土器のクニ」『月刊文化財』昭和56年8月号　1981

2　杉原荘介；『原史学序論』　慶文堂　1943

3　岡本　勇；「土器型式の現象と本質」『考古学手帖』6　1959

4　矢嶋仁吉；『集落地理学』　古今書院　1966

5　F.テンニース著・杉之原寿一訳；『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』岩波書店 1957

6　R.M.マッキーバー著・菊地綾子訳；『社会学入門』　社会思想研究出版　1956

7　日本社会学会編；『教養講座・社会学』　有斐閣　1953

8　上田英吉；「下総国千葉郡介墟記」『東京人類学雑誌」19　1887

9　柴田常恵；『石器時代の住居阯』　雄山閣　1927

10　和島誠一；「集落址」『日本考古学講座』3　河出書房　1956

11　和島誠一；「原始聚落の構成」『日本歴史学講座』　学生書房　1948

12　麻生　優；「住居と集落」『日本の考古学』II　河出書房新社　1965

13　麻生　優；「縄文時代後期の集落」『考古学研究』7－2　1956

14　後藤和民；「原始集落研究の方法論序説」『駿台史学』27　1970

15　中谷治宇二郎；『石器時代提要』　養徳社　1943

16　堀越正行；「縄文時代の集落と共同組織」『駿台史学』31　1972

17　C.T.キーリー；「セトルメント・アーケオロジー」『信濃』3－2　1971

18　Chang, K.O.; "Joward a Science of Prehistoric Society ln K.O.Chang"　1967

19　Chang, K.O.; "Rethinking Archaeology, New York" Random House, 1967

20　Chang, K.O.; " A Study of the Neolithic Social Grouping ; Examples from the New World", American Anthroplogist 60, 1958